

貯 法：室温保存

有効期間：3年

	顆粒	錠
承認番号	22100AMX01970	22200AMX00070
販売開始	2009年11月	2010年5月

胃炎・胃潰瘍治療剤
レバミピド顆粒

レバミピド顆粒20%「タカタ」

日本薬局方 レバミピド錠

レバミピド錠100mg「タカタ」

Rebamipide Granules, Tablets "TAKATA"



2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

3. 組成・性状

3.1 組成

販売名	有効成分	添加剤
レバミピド顆粒20%「タカタ」	1g中 日局 レバミピド200mg	乳糖水和物、結晶セルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、クロスカルメロースナトリウム、デンプングリコール酸ナトリウム、モノステアリン酸グリセリン、タルク、ステアリン酸マグネシウム、含水二酸化ケイ素

販売名	有効成分	添加剤
レバミピド錠100mg「タカタ」	1錠中 日局 レバミピド100mg	低置換度ヒドロキシプロピルセルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、結晶セルロース、ステアリン酸マグネシウム、ヒプロメロース、酸化チタン、マクロゴール6000、カルナウバロウ

3.2 製剤の性状

販売名	性状
レバミピド顆粒20%「タカタ」	白色のフィルムコーティング顆粒で、においはないか又はわずかに特異なおいがある。

販売名	性状	外形			識別コード
		表面直径	裏面重さ	側面厚さ	
レバミピド錠100mg「タカタ」	白色のフィルムコーティング錠	 約7.6mm	 約0.14g	 約3.3mm	TTS-325

4. 効能又は効果

- 胃潰瘍
- 下記疾患の胃粘膜病変（びらん、出血、発赤、浮腫）の改善
急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期

6. 用法及び用量

〈胃潰瘍〉

通常、成人には1回レバミピドとして100mg（顆粒：0.5g、錠：1錠）を1日3回、朝、夕及び就寝前に経口投与する。

〈下記疾患の胃粘膜病変（びらん、出血、発赤、浮腫）の改善 急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期〉

通常、成人には1回レバミピドとして100mg（顆粒：0.5g、錠：1錠）を1日3回経口投与する。

9. 特定の背景を有する患者に関する注意

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合のみ投与すること。動物実験（ラット）で胎児への移行が報告されている。

9.6 授乳婦

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続又は中止を検討すること。動物実験（ラット）で乳汁中への移行が報告されている。

9.7 小児等

小児等を対象とした臨床試験は実施していない。

9.8 高齢者

消化器症状等の副作用に注意すること。一般に生理機能が低下している。

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

11.1.1 ショック、アナフィラキシー（いずれも頻度不明）

11.1.2 白血球減少、血小板減少（いずれも頻度不明）

11.1.3 肝機能障害、黄疸（いずれも頻度不明）

AST、ALT、 γ -GTP、Al-Pの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがある。

11.2 その他の副作用

	0.1～0.5%未満	0.1%未満	頻度不明
過敏症	発疹	そう痒感、薬疹様湿疹等の過敏症状	蕁麻疹
精神神経系			しびれ、めまい、眠気
消化器	便秘、腹部膨満感、下痢、味覚異常	嘔気、胸やけ、腹痛、げっぷ	口渇、嘔吐
肝臓 ^{注)}		AST、ALTの上昇	γ -GTP、Al-Pの上昇
血液			血小板減少、白血球減少、顆粒球減少
その他		浮腫、咽頭部異物感	乳腺腫脹、乳房痛、女性化乳房、乳汁分泌誘発、動悸、発熱、顔面潮紅、舌のしびれ、咳、息苦しい、脱毛、月経異常、BUN上昇

注) トランスアミナーゼが著しく上昇した場合や発熱、発疹等が同時にあらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

14. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

〈錠〉

PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することがある。

16. 薬物動態

16.1 血中濃度

16.1.1 血中濃度

健康成人男性 27 例にレバミピド 100mg (錠 100mg 又は顆粒 20%) を空腹時単回経口投与した時の薬物動態パラメータを以下に示す。両剤は生物学的に同等であった¹⁾。

表 16-1 レバミピドの薬物動態パラメータ

	t _{max} (時間)	C _{max} (μg/L)	t _{1/2} (時間)	AUC _{24h} (μg/L・h)
錠 100mg	2.4±1.2	216±79	1.9±0.7	874±209
顆粒 20%	2.5±1.1	242±118	2.0±0.7	913±337

(平均値±標準偏差、n=27、t_{1/2}は12時間までの値より算出した)

16.1.2 生物学的同等性試験

(1) レバミピド顆粒 20% 「タカタ」

レバミピド顆粒 20% 「タカタ」とムコスタ顆粒 20% をクロスオーバー法により、健康成人男子 14 名にそれぞれ 0.5g (レバミピドとして 100mg) を空腹時に単回経口投与し、投与前、投与後 0.5、1、1.5、2、2.5、3、4、6、8 及び 12 時間に前腕静脈から採血した。液体クロマトグラフィーにより測定したレバミピドの血漿中濃度の推移及びパラメータは次のとおりであり、統計解析にて 90% 信頼区間を求めた結果、判定パラメータの平均値の差は log0.8~log1.25 の範囲にあり、両剤の生物学的同等性が確認された²⁾。

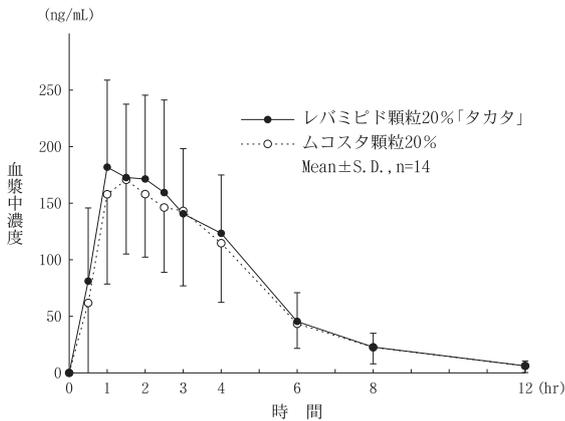


図 16-1 血漿中濃度 (顆粒 20%)

表 16-2 薬物動態パラメータ (顆粒 20%)

	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUCt (ng・hr/mL)	C _{max} (ng/mL)	t _{max} (hr)	t _{1/2} (hr)
レバミピド 顆粒 20% 「タカタ」	845.76±270.02	222.74±75.22	1.8±0.9	2.9±3.4
ムコスタ顆 粒 20%	793.74±268.67	216.07±74.62	1.5±0.7	2.0±0.7

(Mean±S. D., n=14)

血漿中濃度並びに AUC、C_{max} 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

(2) レバミピド錠 100mg 「タカタ」

レバミピド錠 100mg 「タカタ」とムコスタ錠 100mg をクロスオーバー法により、健康成人男子 20 名にそれぞれ 1 錠 (レバミピドとして 100mg) を空腹時に単回経口投与し、投与前、投与後 0.5、1、1.5、2、2.5、3、3.5、4、5、6、8、10 及び 12 時間に前腕静脈から採血した。液体クロマトグラフィーにより測定したレバミピドの血漿中濃度の推移及びパラメータは次のとおりであり、統計解析にて 90% 信頼区間を求めた結果、判定パラメータの平均値の差は log0.8~log1.25 の範囲にあり、両剤の生物学的同等性が確認された³⁾。

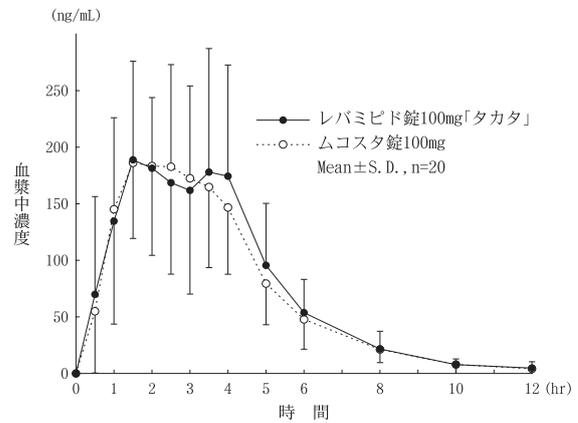


図 16-2 血漿中濃度 (錠 100mg)

表 16-3 薬物動態パラメータ (錠 100mg)

	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUCt (ng・hr/mL)	C _{max} (ng/mL)	t _{max} (hr)	t _{1/2} (hr)
レバミピド 錠 100mg 「タカタ」	912.22±299.31	263.15±82.50	2.2±1.2	2.0±1.4
ムコスタ錠 100mg	868.03±265.97	240.34±86.02	2.0±0.8	2.2±0.9

(Mean±S. D., n=20)

血漿中濃度並びに AUC、C_{max} 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

16.2 吸収

16.2.1 食事の影響

健康成人男性 6 例にレバミピド 150mg^{注)} を単回経口投与した時、食事により吸収の遅延傾向がみられたが、バイオアベイラビリティに影響は認められなかった⁴⁾。

16.3 分布

レバミピドのヒト血漿蛋白結合率は 98.4~98.6% であった⁵⁾ (*in vitro*、限外ろ過法、0.05~5μg/mL)。

16.4 代謝

健康成人男性にレバミピド 600mg^{注)} を経口投与した時、尿中排泄の大部分が未変化体であった。代謝産物として 8 位水酸化体が確認されたが、その量は投与量の約 0.03% とわずかであった。8 位水酸化体は CYP3A4 によって生成した^{6),7)} (*in vitro*)。

16.5 排泄

健康成人男性にレバミピド 100mg を投与した時、尿中に投与量の約 10% が排泄された⁷⁾。

16.6 特定の背景を有する患者

16.6.1 腎機能障害患者

腎機能障害被験者にレバミピド 100mg を単回経口投与後の薬物動態を検討したところ、健康成人に比べ血漿中濃度の上昇及び消失半減期の遅れが認められた⁸⁾。また、透析患者に連続投与した時の定常状態における血漿中濃度は、単回投与時から推定できる血漿中濃度と一致したことより、蓄積性はないものと考えられた⁹⁾。

注) 本剤の承認された用量は 1 回 100mg、1 日 3 回である。

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

〈胃潰瘍〉

17.1.1 国内臨床試験

胃潰瘍患者を対象にレバミピド 300mg/日を投与した試験での最終内視鏡判定は、治癒 60% (200/335 例)、略治以上 67% (224/335 例) であった。

また、二重盲検比較試験において、レバミピドの有用性が認められている。更に、治癒した症例のうち 67 例を 6 カ月間追跡調査した結果、再発が認められた症例は 4 例であり、再発率は約 6% であった¹⁰⁾⁻¹⁴⁾。

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

18.1.1 胃粘膜保護、損傷治癒促進作用

レバミピドは、内因性プロスタグランジン増加や胃粘液量増加などによる胃粘膜保護作用、損傷胃粘膜の治癒促進作用が認められている¹⁵⁾⁻³²⁾。

18.1.2 胃粘膜の炎症抑制作用

レバミピドは、フリーラジカル抑制や炎症性サイトカイン産生抑制などにより胃粘膜の炎症を抑制する作用が認められている^{18),33)-41)}。

18.2 実験胃潰瘍に対する抑制作用及び治癒促進作用

ラットにおいて、水浸拘束ストレス潰瘍、アスピリン潰瘍、インドメタシン潰瘍、ヒスタミン潰瘍、セロトニン潰瘍、幽門結紮潰瘍及び活性酸素が関与していると考えられる虚血-再灌流、血小板活性化因子 (PAF)、ジエチルジチオカルバメイト (DDC)、ストレス・インドメタシンによる胃粘膜傷害を抑制した^{15),16),37),39)}。また、ラット酢酸潰瘍の治癒を促進し、潰瘍作製後120~140日目にみられる再発・再燃を抑制した¹⁷⁾。

18.3 実験胃炎に対する抑制作用及び治癒促進作用

ラットにおいて、胆汁酸の主成分の一つであるタウロコロール酸で誘発した実験胃炎の発生を抑制するとともに治癒促進効果を有した^{18),19)}。

18.4 胃粘膜プロスタグランジン増加作用

ラットにおいて、胃粘膜内プロスタグランジン E₂ 含量を増加させた。また、胃液中のプロスタグランジン E₂、I₂ を増加させるとともに、プロスタグランジン E₂ の代謝産物である15-ケト-13,14-ジヒドロプロスタグランジン E₂ も増加させた^{20),21)}。健康成人男性において、胃粘膜プロスタグランジン E₂ 含量を増加させ、エタノール負荷による胃粘膜傷害に対する抑制作用を示した²²⁾。

18.5 胃粘膜保護作用

ラットにおいて、エタノール、強酸及び強アルカリによる胃粘膜傷害を抑制した^{20),23)}。健康成人男性において、アスピリン、エタノール、塩酸-エタノール負荷による胃粘膜傷害を抑制した²²⁾⁻²⁴⁾。

18.6 胃粘液量増加作用

ラットにおいて、粘液高分子糖タンパクの生合成酵素活性を高め、胃粘膜被覆粘液量及び可溶性粘液量を増加させた。なお、可溶性粘液増加作用に内因性プロスタグランジンは関与しなかった²⁵⁾⁻²⁷⁾。

18.7 胃粘膜血流量増加作用

ラットにおいて、胃粘膜血流量を増加させ、脱血による血行動態の障害を改善した²³⁾。

18.8 胃粘膜関門に対する作用

ラットにおいて、胃粘膜電位差に対してほとんど作用を示さないが、エタノールによる胃粘膜電位差の低下を抑制した²⁸⁾。

18.9 胃アルカリ分泌亢進作用

ラットにおいて、胃アルカリ分泌を亢進した²⁹⁾。

18.10 損傷胃粘膜修復作用

ウサギ培養胃粘膜上皮細胞を用いた創傷修復モデルにおいて、胆汁酸及び過酸化水素によって遅延した修復過程を正常化した^{30),31)}。

18.11 胃酸分泌に対する作用

ラットにおいて、基礎胃酸分泌にほとんど作用を及ぼさず、また、刺激胃酸分泌に対しても抑制作用を示さなかった³²⁾。

18.12 活性酸素に対する作用

レバミピドはヒドロキシルラジカルを直接消去し、多形核白血球のスーパーオキシド産生を抑制した³³⁾⁻³⁵⁾。また、*Helicobacter pylori* による好中球からの活性酸素種産生による胃粘膜細胞傷害を抑制した³⁶⁾ (*in vitro*)。ストレス・インドメタシンを負荷したラットの胃粘膜傷害を抑制すると同時に胃粘膜中の過酸化脂質含量を低下させた³⁷⁾。

18.13 胃粘膜への炎症性細胞浸潤に対する作用

ラットのタウロコロール酸 (胆汁酸の主成分の一つ) 誘発胃炎モデル、NSAIDs 胃粘膜傷害モデル、虚血-再灌流モデルにおいて、炎症性細胞浸潤を抑制した^{18),38),39)}。

18.14 胃粘膜における炎症性サイトカイン (インターロイキン-8) に対する作用

Helicobacter pylori によるヒト胃粘膜上皮細胞からのインターロイキン-8 (IL-8) 産生増加を抑制した⁴⁰⁾。また、上皮細胞内のNF- κ Bの活性化及びIL-8 mRNAの発現を抑制した⁴¹⁾ (*in vitro*)。

19. 有効成分に関する理化学的知見

一般的名称：レバミピド

(Rebamipide)

化学名：(2*RS*)-2-(4-Chlorobenzoylamino)-3-(2-oxo-1,2-dihydroquinolin-4-yl) propanoic acid

分子式：C₁₉H₁₅ClN₂O₄

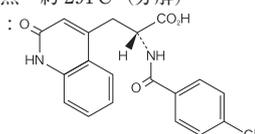
分子量：370.79

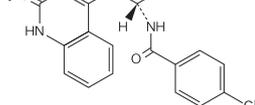
性状：白色の結晶性の粉末であり、味は苦い。

N,N-ジメチルホルムアミドにやや溶けやすく、メタノール又はエタノール (99.5) に極めて溶けにくく、水にほとんど溶けない。

N,N-ジメチルホルムアミド溶液 (1→20) は旋光性を示さない。

融点 約291℃ (分解)

化学構造式：



及び鏡像異性体

20. 取扱い上の注意

〈顆粒〉

プラスチックボトル製品は、湿度の影響を受けやすいので、使用の都度キャップをしっかりと締めること。

22. 包装

〈レバミピド顆粒 20% 「タカタ」〉

0.5g×210包 [分包]

100g [プラスチック瓶、バラ、乾燥剤入り]

〈レバミピド錠 100mg 「タカタ」〉

100錠 [10錠 (PTP) ×10、乾燥剤入り]

23. 主要文献

- 1) Hasegawa, S. et al. : Clin Drug Invest. 2003 ; 23 (12) : 771-779.
- 2) 社内資料：生物学的同等性試験 (レバミピド顆粒 20% 「タカタ」)
- 3) 社内資料：生物学的同等性試験 (レバミピド錠 100mg 「タカタ」)
- 4) 岸 清一郎 ほか：臨床成人病. 1989 ; 19 (3) : 355-363.
- 5) 塩屋良秀 ほか：医薬品研究. 1989 ; 20 (2) : 522-533.
- 6) Koyama, N. et al. : XENOBIOTICA. 2002 ; 32 (7) : 573-586.
- 7) 日本薬局方解説書編集委員会編：第十八改正日本薬局方解説書 2021 : C-6232-6237
- 8) 菊池 博 ほか：新薬と臨床. 1995 ; 44 (7) : 1179-1182.
- 9) 深沢和浩 ほか：新薬と臨床. 1995 ; 44 (10) : 1667-1671.
- 10) 竹本忠良 ほか：臨床成人病. 1989 ; 19 (4) : 539-551.
- 11) 竹本忠良 ほか：臨床成人病. 1989 ; 19 (4) : 553-582.
- 12) 竹本忠良 ほか：臨床成人病. 1989 ; 19 (5) : 739-751.
- 13) 竹本忠良 ほか：臨床成人病. 1989 ; 19 (5) : 753-775.
- 14) 竹本忠良 ほか：臨床成人病. 1989 ; 19 (7) : 1265-1291.
- 15) 山崎勝也 ほか：薬理と治療. 1988 ; 16 (5) : 1997-2005.
- 16) Yamasaki, K. et al. : Jpn J Pharmacol. 1989 ; 49 (4) : 441-448.
- 17) 白木正裕 ほか：日薬理誌. 1988 ; 92 (6) : 389-395.
- 18) 岡部 進 ほか：Ther Res. 1991 ; 12 (10) : 3253-3263.
- 19) Kishimoto, S. et al. : Res Commun Chem Pathol Pharmacol. 1992 ; 78 (3) : 259-277.
- 20) Yamasaki, K. et al. : Eur J Pharmacol. 1987 ; 142 (1) : 23-29.
- 21) Kleine, A. et al. : Dig Dis Sci. 1993 ; 38 (8) : 1441-1449.
- 22) 中村 壺 ほか：臨床成人病. 1989 ; 19 (6) : 1109-1114.
- 23) 川野 淳 ほか：日薬理誌. 1991 ; 97 (6) : 371-380.
- 24) Dammann, H. G. : Eur J Gastroenterol Hepatol. 1994 ; 6 (10) : 911-915.
- 25) 石山広信 ほか：薬理と治療. 1988 ; 16 (10) : 4103-4109.
- 26) 石山広信 ほか：薬理と治療. 1988 ; 16 (10) : 4111-4118.
- 27) Ishihara, K. et al. : Arzneimittel-Forsch/Drug Res. 1992 ; 42 (II) : 1462-1466.
- 28) 山崎勝也 ほか：薬理と治療. 1990 ; 18 (9) : 3395-3400.
- 29) 山崎勝也 ほか：薬理と治療. 1990 ; 18 (10) : 3765-3772.
- 30) Watanabe, S. et al. : Aliment Pharmacol Ther. 1996 ; 10 (6) : 927-932.
- 31) Watanabe, S. et al. : Dig Dis Sci. 1998 ; 43 (9) : 107S-112S.
- 32) 山崎勝也 ほか：薬理と治療. 1988 ; 16 (6) : 2487-2495.
- 33) Yoshikawa, T. et al. : Arzneimittel-Forsch/Drug Res. 1993 ; 43 (I) : 363-366.
- 34) Naito, Y. et al. : Free Radic Biol Med. 1995 ; 18 (1) : 117-123.
- 35) Ogino, K. et al. : Eur J Pharmacol. 1992 ; 212 (1) : 9-13.
- 36) Suzuki, M. et al. : Gut. 1994 ; 35 (10) : 1375-1378.
- 37) Yamasaki, K. et al. : Pathophysiology. 1994 ; 1 (4) : 251-257.
- 38) Murakami, K. et al. : Dig Dis Sci. 1997 ; 42 (2) : 319-325.
- 39) Kim, C. D. et al. : J Pharmacol Exp Ther. 1995 ; 275 (1) : 340-344.
- 40) 三原充弘 ほか：消化器科. 1997 ; 24 (6) : 681-688.
- 41) Aihara, M. et al. : Dig Dis Sci. 1998 ; 43 (9) : 174S-180S.

24. 文献請求先及び問い合わせ先

高田製薬株式会社 文献請求窓口

〒336-8666 さいたま市南区沼影1丁目11番1号

電話 0120-989-813

FAX 048-816-4183

26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

高田製薬株式会社

さいたま市西区宮前町203番地1